



性接待で
若女将

『部屋はどちらになりますか？』

『良い部屋だね』

『窓からの景色もきれいだ』



今日のご予約のお客様は、具外から来られた議員さんたち。
議員さんたちに満足していたければ、この旅館が評判になるかもしれない？

あっ、いつも以上に張り切ってお客様を部屋へと案内しました。

「いや、良い旅館だね、こんな可愛い若女将もいるなんて」
「ありがとうございます」

「政務調査費で来る温泉は最高やー」
「？」

「いや、その歳で本当に偉いね」
「いえ、そんな」

「褒められるとおっことは照れてしまいます」
「もっと近くへおいでよ、可愛い顔をよく見せてちょうだい」
「ほ、はい」



「きやっ!？」

「お?可愛い反応だね、びっくりしちゃった?」

お客さんがおっこのお尻をさわってきました。



それも、ただ触るだけじゃありません。

そのいやしい手つきは、そういう経験のないおっこでも本能的に危険を感じるほどでした。

「やめ!やめてください」
「いいじゃない、これもサービスだから、ね」

「ホントにもうやめて！」

おっこは乱暴にお客さんの手を振りほどきました。

「なに？こ、こっちは客やぞ！なんやその態度は！」

「客ですって？いくらお客様でもやっていいことと悪いことがあるわ！
こんなのセクハラよ！」

「なに？まったく、なんちゆう旅館や！」
お客様は憤慨しています。



「あなた、えらい議員さんなんでしょ？そんな人がセクハラなんて！」

「セクハラやて？おま…これのどこがセクハラやねん！スキンシップやんけ！」

「スキンシップって…」
「おっこちゃんだっけ？あんたも仕事でやってんねやる？ここは太人になって
スキンシップやってことで折り合いをつけようやないか」

「…もういいです！このことはおばあ！女将に報告させていただきます」
「なに？」

「あんまりだあああああ！」

「ええー？」

議員さんが突然、子どものように泣きわめき出しました！

「お、お客様、おち、落ち着いてください！」

「うわあああん！おではねえ！本当にもう……小さな子どもが大好きで、だからそういう子ども達に申し訳なくて」

「申し訳ないんだったらやらなきやいいのに……」

「私も死ぬ思いでもう、あれですわ！こんなこと言うのは本当に辛くて情けなくて、子ども達に本当に申し訳ないですわ！」

「ちよっと、泣き止んでください！わかりましたから！」

「おっここが必死にだめですが、議員さんは感情が昂ってしまい、手が付けられません。」

「だから！この議員という大きなカテゴリーに比べたら！セクハラなんて！うわあああ——セク、ハラなんて折り合いをあああああああ！」

「おう、なんやなんやー何泣いとんのや」

「若女将が何を言ってもセクハラやセクハラや言うんですわ」

「なに？どういふこつちやー」

「少子高齢化はわが国のみならず、日本の問題やないですかー」

「せや」

「誰がやってもおんなんじや、誰がやってもおんなんじや」

「なら俺がーうふわああんー俺、があああんー」

「そのとおりやん、ええこと言うなほんま」

「さすがやわ」

「目の付け所が違うわ」

「せやな、我々の手で少子化問題に立ち向かわなあかんわ」



「よっしゃー子作り支援法案可決やー」

「ふぐああああー議員として少子化を少しでも解決させたいーそう思うからこそ」

「耐えに耐えて、何とか着床させたいその一心でーやっとな議員になっただん

「ですー」

「目からうろこやわーやっば覚悟が違うわ」

「やる時はとことんやる男やおもっとなわ」

「だ、だめだーこの人たち何かおかしいー」

「おっこは盛り上がるお客様に気づかれないよう、そっと部屋から逃げようとしてましたーしかしー」

「何逃げとんねん！」
見つかってしまい、男たちに羽交い絞めにされてしまいました。

「やめてえ！」

わち

わち

わち

ガシッ

バーザッ

「おっこちゃんはまだ若いから政治のことが日本の未来のことが
関心がないかもしれないけど、これはすぐ大事なことになるや」
「はなしてえ！」
「ヒトの話ぎいとんのか」





「優しくしてやれば調子こキやがってこのガキヤあ」
「痛い目見たくなかったら言うとおりにしろ！」
「こんな旅館の一つや二つ俺の手にかかればあつという間に潰せるんやぞ」

「おっちゃんがおっこのおまんこマッサツ器でよくほぐしたるからな」
「未開通やから裂けたらあかんからな」
「子作り保護法案や」
「ああああーちよつとやめてツんああああー」

「子作りは助け合いや！次はおっこちゃん頑張る番や」
「お、おちんちん！？いやっ」
「顔背けるな！よく観察するんや理科で習ったやろ」
顔を近づけると、つんと臭います

ゼクッ

グッ

グッ

「ええか、アイスキャンデー舐めるみたいにペロペロするんや」
「ええっ！？」
信じられないことを言われて、思わず聞き返したおっこ。
男は不機嫌になったように
「なんや！アイスキャンデー好きやないんか！ええからさっさと舌だせ！」



「んむ…んっ、んは…んっ、んっ」
「むむ、うーむ…ええぞ！存外飲み込みが早いやないかい」
「その調子なら立派に若女将やれるやないか…へへ」
「おっ、おっ、出そうや！よし、よしよし、おっこー！回ん中出したるからゴックンするんやで」

びゅるびゅーっ

びゅるるるっ

せろっ

がっ

がっ

がっ

がっ

「んはっ、あ…ああああッ！」
「おちんちんの先から白い液体が噴き出てきました。」
「(うんちを…なに、なにが…臭い…なにこれえ！)」
「飲み干せよお…吐いたらいでこますぞ」



「やだ！汚い！そんなとこ舐め！」
「おとなしくしろよ」



悪い議員さんがおっこのおまんこにむしやぶりつきました。
おっこのとってそこはおしっこをする部分でしか無かったので嫌悪感しか
ありません。

「なんや、その様子やおっこちゃんオナニもしたらんのか」

「はっ、あっ！なにこれ！」
おっこの反応に熱い吐息が混じり始めました



「お？おっこちゃん、何や色っぽいやないから」
「え？な、何が…んっ」
「愛液も溢れ出しとる…いっちょ前に発情しやがって
子作りする準備万端やな」
「あっ、んあっ…ふあ…っ」

「ぎゃあー」

ドサッ

カウ

カウ

カウ

カウ

アッ

畳の上に押し倒され、男のいきりたった
ペニスがおっこの膣口に触れました

「な、何するの…」
「うん？おっこちゃんわからんのか。子作り言うてるやろ
保体の授業ちゃんと受けなあかんで！おっこちゃん体育得意なんやろ」



「ぎゃあああああああああッッ」

ずん
ん
ッ

ヒクッ
ヒクッ

びく
びく

びく
びく

男は一気に腰を打ち付け、おっこのせまい処女穴に
ペニスがかまかせにねじ込まれました。

「うおおお、処女膜避けるのがわかるわ
すごいわおっこちゃん、ええおめこちゃん！もうおっこちゃんちゃうわ！
おめこちゃんやー！
「いたいよー！」





「やだ!とめ:とめてえ!
いだい!いだいッ:んあああッ」
息も絶え絶えに必死に静止するおっこを
無視して男は一心不乱にピストンを繰り返します
「ふへへ:冗談やろ!こんな気持ちいいのに
止められるわけあらへん!」

はあ

わん

わん

わん

あゝ

あゝ

ずん
ずん
ずん

ずん

ずんツ



「ひひひい！おめこちゃんわかるかあ？
おっちゃんが、おっちゃんがおめこちゃんの
初めての男何やぞお！おっちゃんがおめこちゃんを
大人にしたんや！よう覚えとってやあ！」
「あっあっ、ひぐっ！うわあああ！」
「ほんでなっ、今からおっちゃんが、おめこちゃんの中に
精子びゅびゅーって出すからな！そしたらおっこちゃん
お母さんになるんや！」

はあ

はあ

はあ

セクッ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ

ずっ



「よっしや！次はおっちゃんかぶつ濃いザーメンをおっこの子宮に
流し込んでやるからなあ！」
「あああああッ！ふぐううっ…うっ、うっ、ううっ」



「うぐう…うっ、ううっ、ひん！」
「あら、泣かないでよおっこちゃん、これじゃあおっこちゃん何か悪いこと
してるみたいやん！」
「うううっ！うう！」
「気分悪いわ、そんなんでのこの旅館の若女将やっていけんの？
やれやれ、おっちゃん射精するわ」

びゅー

ビュルルーツ

ずーん

ずーん

ずーん

がわ

セクッ

がわ

セクッ

セクッ

「おおおっ！何やこのおまんこ！ほんまに名器やん！これはすごいわ」
「も、もうやめて！仕事や、仕事しなげや」
「客への接待も大事な仕事やろ！」
「サービスしてくれたら最良にするで！」
「や、やだあ！」



ずく

ずく
ずく
ずく

ずが

ずく

がわ

セクヤ

がわ

セクヤ



「やだやあらへんがな…うっ、はあ
きもちええなあ…おっこちやあん
わしの愛人にならへんか？めっさ
可愛がつたるで…こうやってな！」
「んあああっ！ひ、ひぐう…やめてえ…」



「よおし、出すでお！元気なザーメン
ビュビュツで着床させたるぞ！」
「うあ：あつ、やめ、あッ！」
「おりゃああ！孕めえええ！」

びゅっ

ゼクッ

ゼクッ

はあ

はあ

びゅるるるるるー

はあはあ

びく

びく

はあ



これでもう何回目でしょうが、お客様全員のお相手をして、それでもまだおっこは解放させてもらえません。

「おっちゃんもう疲れてきたわ、おっこちゃん呑み込み早いからもう任せでもええやろ？おっこちゃんが動いてくれや」
「んああッ！ま、まだ続けるの…？」
「当たり前やがな！おっこちゃんが立派な便所女将になるまで議員として誠心誠意面倒みたるでえ！」



「上手いやないか！おっこちゃん、あんたには娼婦の才があるな
 この性技を生かせば商売繁盛するでえ！」
 「ふっ、うっく……うう！はやくイってえ……！」
 「ひひー！せやなあ！おっこの子宮に……ぶちまけたるわあ！」

あ ああ ああ
 ああ ああ

びんびん
 びんびん
 びんびん

わう
 わう
 ずう
 ずう
 わう
 わう

ずう
 びんびん
 びんびん
 びんびん
 びんびん
 びんびん



「よっ！おう！最初はきつくて痛い
くらいやったけど、使い込んで
どうしてええ塩梅のしまり具合に
なってきたやないか！」
「うぐう！い、痛いいい……」
「何や、まだ痛いんか？ちよっとおまんこ
裂けてたからなあ」

ずんずん

はあ

ずんずん

ぎゅぎゅ

ギンギン

ギンギン

ギンギン

びく

びく

はあ

せつぱ

「あーイクイクイク！あつ、いったわ！
こんな名器に生まれてきてくれて
ありがどうな、おめこちゃん！日本の
未来は明るいわ！」
「はあ、はあ、も、もうやだあー助けてえー」



ビクッ！
ビクッ！

わわ
わわ
わわ

びゅっ♡

びゅっ♡
びゅっ♡
びゅっ♡
びゅっ♡
びゅっ♡

わわ
わわ
わわ

はあ
はあ

「ほら 次はこっちや! ちゃんとしゃぶれよ!」
「んぶううう!」
「フェエラも上手くならんと旅館の女将は務まらへんぞ!」
「おめこしこたま突かれまくってもフェエラに集中してこそ
プロの接客やからな!」

ぎゅん
ぎゅん





「こっちはもう出るぞ！そらっそらっ 糞ボケ
おまんこギユツと絞めんかい売女！」
「んおおおおおおおッ！」
「オラッ！口の方が疎かになつとるやんけ！
気を散らすなや！」
「おごおおおッ！んおッ！んおッ！んおッ！」

「よっしゃ、まあまあ合格やな！
ほな出すで！全部飲み干せ！」
「おぶっ！おごええええッ！」
「こぼれとる！こぼれとる！何しとんねん
お前は！そんなんで若女将が務まるかい！」
「げほっ！おえっ！んぶうッ」



わん

わん

わん

んんんんん
んんんんん
んんんんん

んんんんん
んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん

んんんんん...



「どれ、そろそろこつちも開発して
 やらなあかんなあ！」
 「うああッ！えっ！？く、苦し…
 そ、そっちは」
 「すげえ！おほっ、何やこれ！めちやめちや
 狭くなった！」
 「あはあッ、あ…あ、息が…」

ずぱ

はあ

はあ

ぎゅ
 ぎゅ

はあ

ずく
 ずく

ずく
 ずく

ずく

ずく
 ずく



「あーあひい！くるひっ、やめッ
やめええ！死んじやうッ、うわああ」
「おあー！無理無理！すぐ出るわ！おあー！」
「おっこはお尻も名器やな！全身オナホール
やがな」
「いやあああー！」

びゅるびゅーっ

ぎゅぎゅ

ぎゅぎゅ

セクッ

ぎゅぎゅ

ぎゅぎゅ

セクッ
セクッ

セクッ

セクッ

ドキ

ドキ

「おお、ほんま…すっご…！おっこの二穴半端ないって！
おっこ半端ないって！おまんこの締め付けめっちゃうギョツツするもん！
こんな耐えられへんやん普通！」

ぢぢぢ
ぢぢぢ
ぢぢぢ

ぢぢ

ぢぢ

ぢぢぢ
ぢぢぢ

ぢぢ
ぢぢ

はあ

ぢぢ

ぢぢ

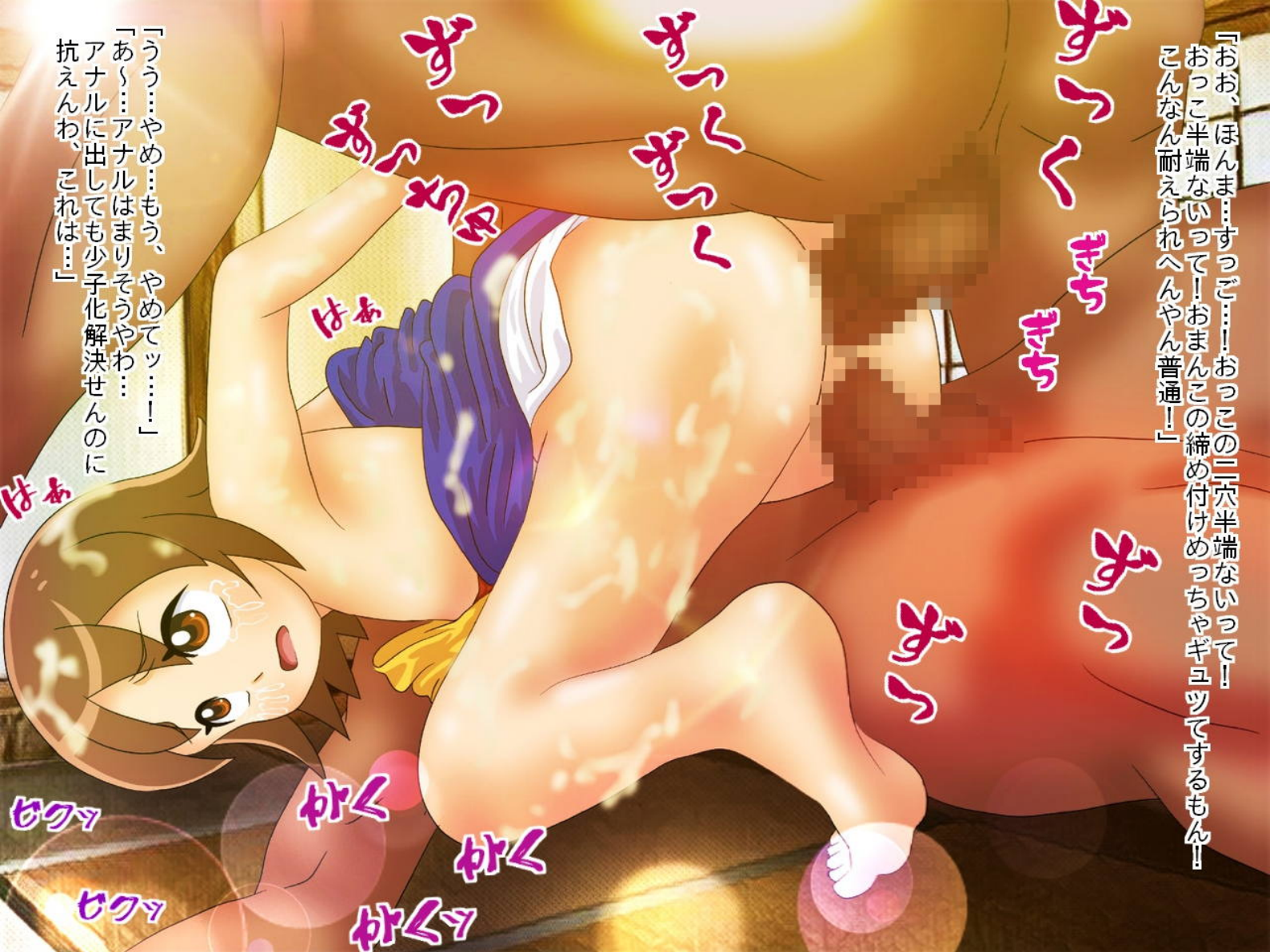
ぢぢ

はあ

ヒクッ

ヒクッ

「うう…やめ…もう、やめてッ…！」
「あ…アナルはまりそうやわ…
アナルに出しても少子化解決せんに
抗えんわ、これは…」



「くっそお！半端な…出る！搾り取られるわ、これは！
 おっこちゃんの身体エッ回いわ！あかんわこれ！
 射精待ったなしやん！くおおおお！」

びゅるびゅるびゅーっ
 びゅっ

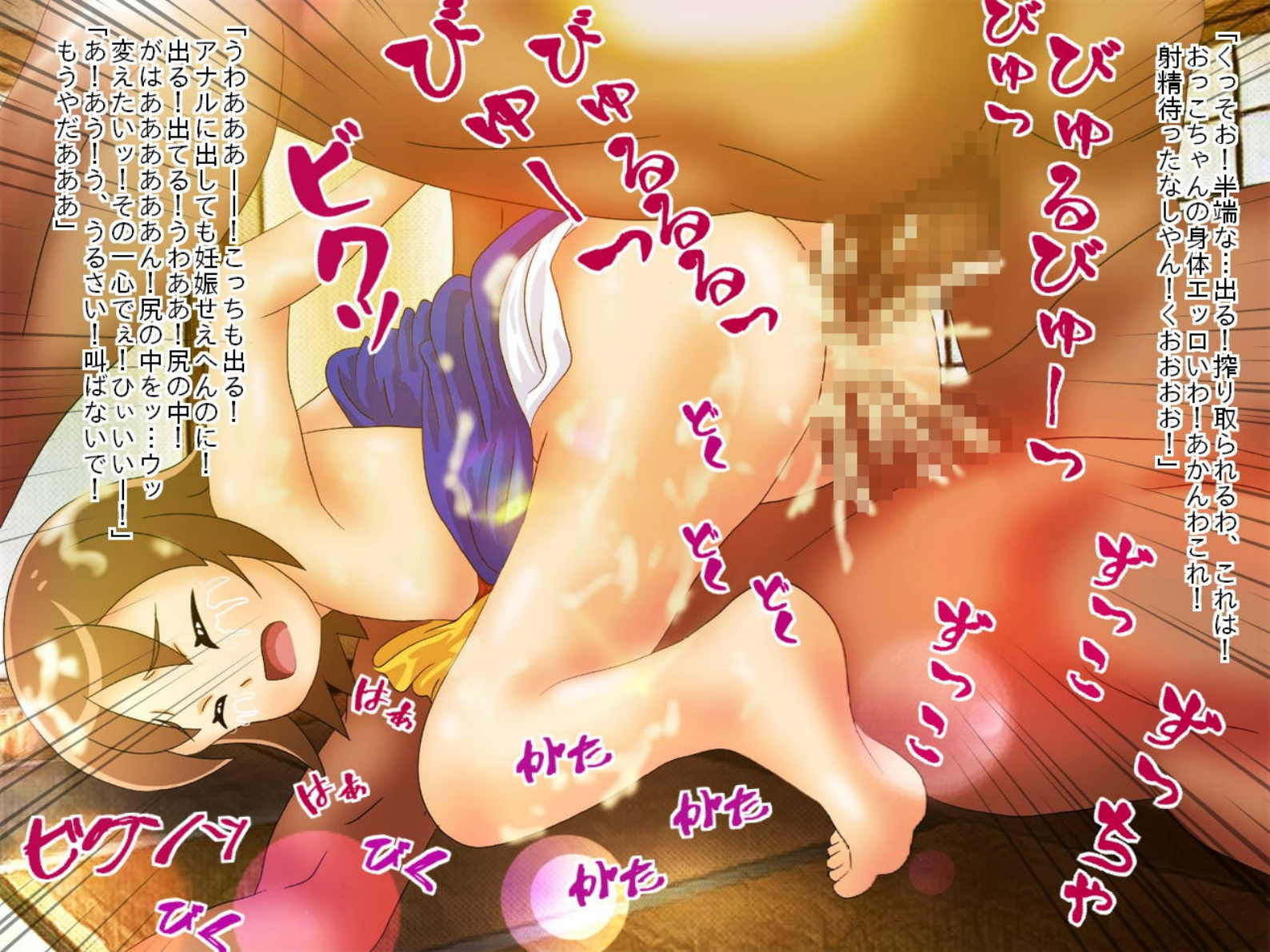
びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅ
 びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅ
 びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅ
 びゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅびゅ
 ビンク

さっさっさっさっさっさっさっさっさっ
 さっさっさっさっさっさっさっさっさっ
 さっさっさっさっさっさっさっさっさっ
 さっさっさっさっさっさっさっさっさっ
 さっさっさっさっさっさっさっさっさっ
 さっさっさっさっさっさっさっさっさっ

「うわああああ！こつちも出る！
 アナルに出しても妊娠せえへんのに！
 出る！出てる！うわああ！尻の中！
 がはあああああん！尻の中をツッウツ
 変えたいツ！その一心でえ！ひいいい！」
 「あ！あう！う、うるさい！叫ばないで！
 もうやだあああ」

ビクビク
 びく
 びく

はあ はあ はあ
 かた かた かた
 びく
 びく



「ほー…、ほー…、ああー最高の旅館やねほんま…
若女将はまんこやし…また来るわ…カツリシンのプリペイドカードと
ヨービ一の領収書あつめて！」

ぽ
ぽ

どし
どし
どし

どろ
どろ

どろ
どろ

はあ

はあ

はあ

ドキ
ドキ

ドキ

「はあ！はあ！はあ！」
「おっこちゃん、息が上がってるね…
こっちももうヘトヘトやわ。ちよっと
休憩するか」
「あ…や、やっと…休める…！」



「おっこ、中々戻らないね！何かあったんだらうか？」

「おっこの帰りが遅いので女将が心配しています。」

「女将さん、どうなさったんですか？」

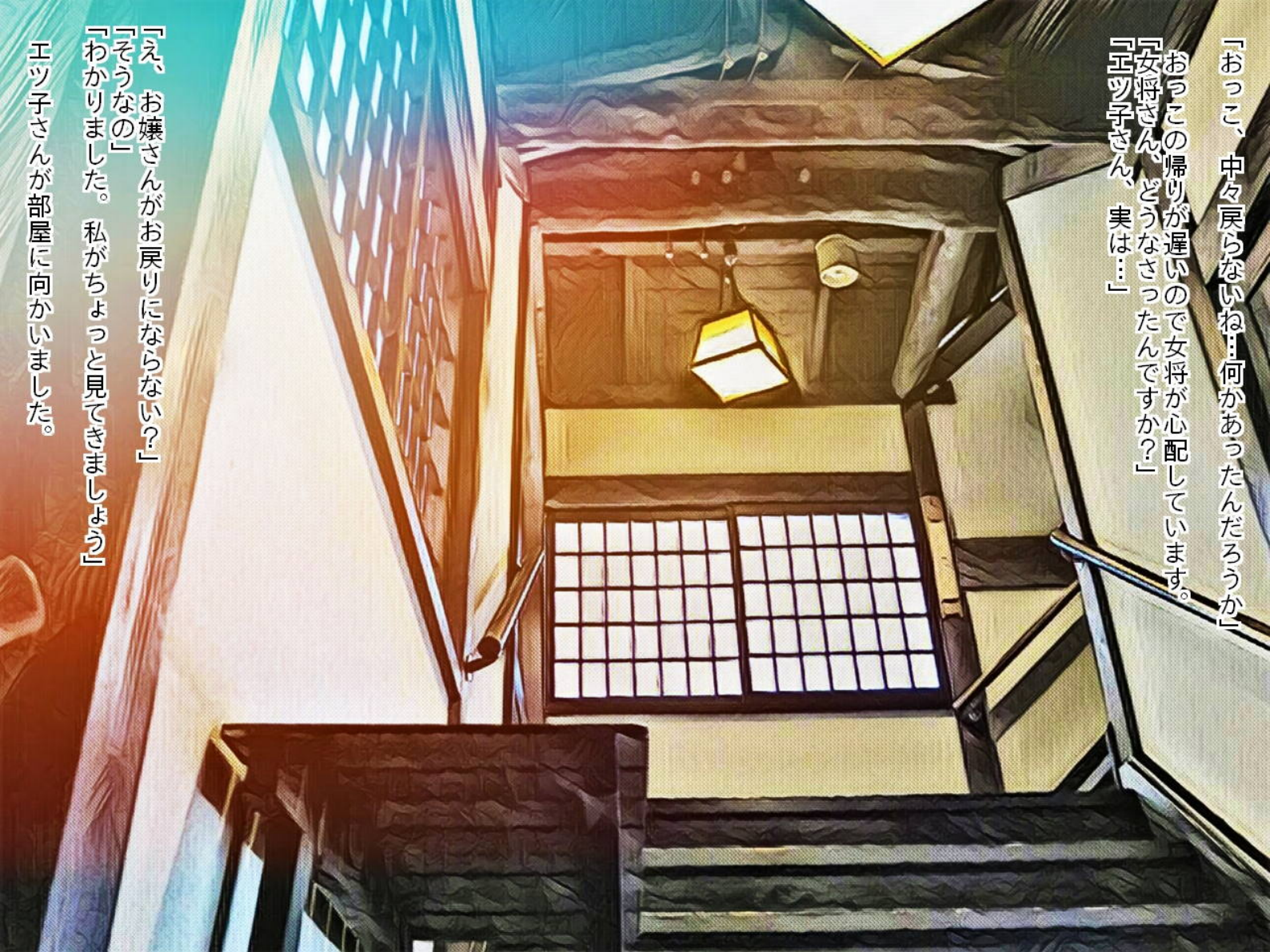
「エツ子さん、実は……」

「え、お嬢さんがお戻りにならない？」

「そうなの」

「わかりました。私がちょっと見てきましょー」

エツ子さんが部屋に向かいました。



「失礼します！こちらに……あっ！」
部屋に入ったエツ子さんが変わり果てたおっこの姿に気付き、大声を上げます。

「お、お嬢さん！」
「あ、まずい」
興奮状態で突っ走っていた議員たちはエツ子さんの姿を見て我に返り、この重大さを悟りました。

「あ……あなた達、なんてことを……！」
「……ち、違う……ありえへん……わ、畏や！若女将が○○○なんておかしいやないか！それが畏だという証拠や！」
「えっ……」
「いや……おま……お前が……」



「ぼっぼっぼっぼっ！」
「追い詰められた議員が突然高笑いしました。
「な、何を笑ってるんです！あなた達、お嬢さんに何をしたかわかってるんですか！」

「そうや、レイプや。せやけど、少子化対策や」

「はあ？」
「レイプは犯罪ですよ。犯罪ですけれども！議員というそういう大きい括りのなかでは、極々小さいものなんですウー！」

「そんなわけないじゃないですか！」

「少子化問題はー！我が県のみうわああーん！我が県のみならず！日本中の問題やないですか！そういう問題を解決したいがために俺はねえ！

心わあああん！命がけでええええッ！……ツウ、ツク。仲居さん！
あなたには分からないでしょうけどね！」



「わかりませんよ。女将さーん！警察呼んでえー！」
「あー待って待って！」



その後、議員の皆さんは逮捕されて三ヶ月スになりました。
どんな理由があってもレイプは絶対してはいけませんね。

PS

おっこはまだ初潮前だったので妊娠はしませんでした。